



篠津地域農業



日
人
は
の
学
校

体験学習

石狩川下流域には、広大な泥炭地が広がっています。その中の篠津地域では、明治2(1869)年に北海道開拓使が設置されてから、排水のための運河の掘削が始まりました。しかし、泥炭地のため、十分な排水効果が得られず、地域の大部分は利用されないまま、放置されていました。

第2次世界大戦後、食料の増産と海外の戦地から日本に復員してきた人々の救済が日本の緊急の課題となりました。

昭和25(1950)年、北海道の資源の総合的な開発を目的に北海道開発庁が設置され、昭和29(54)年には、政府が招いたフランス、FAO(国連食糧農業機関)、世界銀行の調査団が訪れ、篠津地域が最も開発効果の高い地域として、融資対象地域に選定されました。昭和30(55)年、篠津地域泥炭地開発事業は、開田を主な目的に着手していた排水事業も含め、着工されました。泥炭地開発に関する様々な技術を発達させた開発事業により、篠津地域は、現在、日本有数の穀倉地帯となり、海外での泥炭地開発のお手本ともなっています。



篠津中央土地改良区

理事長 古谷陽一様

私たち篠津中央土地改良区は、農業体験学習として、5月の田植え体験と今回(10月3日)の稲刈り体験を受け入れています。2000年から今回で16回目です。篠津地域は、江別市、当別町、月形町、新篠津村の4市町村にまたがる、広大な稲作地帯。ゆめぴりかななどの安心安全なおいしいお米を生産しています。泥炭地のため、かつては農地に適していませんでしたが、大規模な開発事業により、豊かな水田地帯に生まれ変わりました。

都市で暮らす人々や子どもたちに、稲作や田んぼの農業用排水施設の維持管理がいかに大切か、きちんと理解してもらいたくて、農業体験事業を行っています。これからもこうした体験事業を続けていきます。

篠津運河の掘削

泥炭地帯を安定させ水田地域にするには、まず土中の水を抜く必要があります。昭和30年、篠津地域泥炭地開発事業が始まると、篠津運河は、排水路だけでなく用水路(水田に必要な水を取るための水路)の役割も持つことになりました。

工事は地下水を抜くことから始まり、ラダーエキスカベータで表層の泥炭を、ポンプ浚渫船で下層の砂質土と粘土層を掘削しました。掘り出された泥は客土に使われました。人間の英知と意思を結集した巨大プロジェクトが完了したのは、昭和46(1971)年のことでした。

出展：篠津地域泥炭地開発事業誌